

【資料2】

平成24年度 武雄市立武内小学校 学校評価結果

1 学校教育目標
学校大すき・友だち大すき・ふるさと大すき 武内っ子

2 学校経営ビジョン
<p>☆ めざす子ども像…(1)た:確かな学びを続ける子ども (2)け:健康でたのしい子ども (3)う:美しい心を育てる子ども (4)ち:チャレンジする子ども</p> <p>☆ めざす教師像…(1)子どもを第一に考<b>総括的な教育目標を、より具体的な児童生徒や教師、学校の「姿」としてイメージする</b></p> <p>☆ めざす学校像…(1)落ち着いた学習でさる静かな学校 (2)いしめりあひ、明るく楽しい学校 (3)めいどづいといはりの元氣な学校</p>

3 本年度の重点目標	4 前年度の成果と課題
<p>① 教職員総意の学校づくり</p> <p>② 学びが分かる教育活動</p> <p>③ きめ細やかな連携</p>	<p>① 三育成部が、学校教育目標の具現化に向け、積極的に活動できている。各専門部の連携も強化し、さらに教育効果を高めていく。</p> <p>② 全体的に高評価であり、児童の基礎的学力が身につけてきている。ICT活用教育の充実を図り、iPadを活かして、さらなる向上をめざしていく。</p> <p>③ 保護者に対する周知徹底については、4月に学校長から教育目標及び学校経営方針についての説明があり、それに基づいて各々が目標及び方針を策定している。</p> <p>④ 児童に対する安全指導や大豆等、各学年でも活用することができた。</p> <p>⑤ 全職員で毎月の安全点検を確実にし、遊具使用時の事故は0である。</p> <p>⑥ 児童の遊具安全使用に関する意識は97%である。</p> <p>⑦ 危機管理対応のマニュアルを全職員に配布したが、不審者対応訓練も行うことができた。</p>
<p>このうち、特に今年度力を入れるものを絞り込む</p> <p>絞り込むに当たって、特に、前年度、「何ができて、何ができなかったか」を参考にする</p>	

5 総括表

① 教職員総意の学校づくり						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
学校運営	学校経営方針	学校教育目標及び学校経営方針の周知	①教職員の周知徹底100%を目指す。 ②児童保護者の周知率90%以上を目指す。	①職員会議において、学校教育目標・校務分掌・学級経営・評価育成システム等の関係性を理解させる。 ②児童に対しては、全校朝会の場で説明を行う。保護者に対しては、学校便りでも知らせるとともに、総会の場で説明し、周知徹底を図る。	A ①教職員の周知徹底については、4月に学校長から教育目標及び学校経営方針についての説明があり、それに基づいて各々が目標及び方針を策定している。 ②保護者は75%だが、児童は98%と目標の周知率90%を達成している。	①教職員に対する周知については、来年度も今年度と同じような方法で学校運営への参画を進め、組織的な取り組みを強化していく。 ②保護者に対しては、育友会総会、学校だより等で広報活動を行っていく。児童に対しては、全校朝会の話に定期的に取り入れながら話をしていく。
	教職員の資質向上	服務規律の保持	信用失墜行為・交通事故・セクハラ・パワハラを防止する。	職員会議等の場で研修を重ねるとともに、長期休業期間中に研修の機会を設け、全職員で共通理解を図り、服務規律違反0を継続する。	A 毎月の職員会議のごとに、校長から服務についての指導を行い意識付けを行っている。長期休業中にはセクハラ・パワハラ研修会も行った。服務規律違反0を継続中。	本年度の取り組みを継続していき、職員の意識を高め、服務違反0を継続していく。
		評価育成システムの有効活用	自己目標の達成率90%以上を目指す。	自己目標申告書の作成、中間見直し等に教頭も積極的に関わり、その目標達成のために相談体制をとり、指導助言を行う。	A どの職員も自己目標達成率90%以上であった。	自己目標申告書作成及び見直しの時に、一人で考えるのではなくいつでも相談できる体制を確立していく。
	開かれた学校づくり	地域連携	①地域行事へ積極的に参加させる。 ②学校サポート制の活用(各学年1回以上)をめざす。	①武内町大運動会及びふれあい祭りを学校教育課程の中に位置づけ、学習発表の場として活用する。 ②学校サポート制の活用を念頭に置いて、各教科等の年間計画を作成し、実施する。	A ①児童95%、保護者83%が積極的に参加しているという結果になった。 ②全校への水泳指導や大豆等、各学年でも活用することができた。	①学校の活性化ばかりでなく、地域の活性化に学校がどのように関わるかについても念頭に置き、より地域と連携を進めていく。 ②今後も年1回は活用していくように計画を立てる。
危機管理	安全点検	遊具使用時における事故を防止する。	遊具にあわせた点検項目に沿って点検を毎月行い、全職員にその結果や対処方法を知らせる。また、児童の安全使用意識を高めさせる。	A ①全職員で毎月の安全点検を確実にし、遊具使用時の事故は0である。 ②児童の遊具安全使用に関する意識は97%である。	学校の安全点検の取り組みについての保護者の評価は58%であり、「よく分からない」が25.2%である。安全点検の結果を知らせる必要がある。	
	危機対応	危機管理マニュアルの見直しと研修を行う。	危機管理マニュアルの見直しを行い、夏期休業中に研修の機会を設定し、職員に周知徹底をはかる。	A 危機管理対応のマニュアルを全職員に配布したが、不審者対応訓練も行うことができた。	全職員で危機管理研修の機会を作り、職員の意識を高める。	
② 学びが分かる教育活動						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
授業力向上	校内研究推進	読解力向上をめざした国語科学習指導法を研究する。	読解読書領域において、書く活動と対話力、ICT機器の活用を通して、児童の読解力を高める国語科指導のあり方を実践的に検証する。	学力向上対策委員会において、佐賀県学習状況調査、標準学力検査のデータ分析結果に基づく課題を把握し、定着度に課題のある内容については授業における重点指導項目とすることを推進する。	A ①全職員・学年グループで教材研究や指導方法の検討を行い、各学年1回、研究授業を実施した。 ②活発に研究協議を行うことができ、講師の助言を頂きながら指導法についての研究を深めることができた。	①全職員で教材研究や指導方法の検討し、授業研究会を行うことで指導法の研究を深めることができた。 ②書く活動と対話力、ICT機器の活用を通して、児童の読解力を高める国語科指導のあり方をさらに深める。
	指導方法改善	個に応じた指導方法を工夫・改善する。	定期的にテスト結果を分析し、TT・少人数による個に応じたきめ細かな指導のポイントを把握する。	B ①単元テストの年間平均点は80点を超えている。しかし、一部落ち込んでいる児童もおり、全員7割以上は達成できていない。 ②「授業が分かる」と感じる児童は8割以上である。	①TTや少人数による個に応じたきめ細かな指導の工夫を行い、理解の不十分な児童への指導の充実を図る。 ②朝の時間には、iPadの活用を含め、ドリル学習を繰り返し行い、基礎基本の学習の定着を図る。	
		言葉の特徴やきまり、漢字、計算力を身に付けた児童を育成する。	①言葉の特徴やきまり、漢字、計算力の定着に係る学習環境を整備する。 ②武雄市漢字・計算検定テストを実施し、結果を記録する。	A 計算検定は90点以上で合格証。7月は9割、12月は10割。職員の協力体制も良くできている。	①言葉の特徴やきまり、漢字、計算力の定着を図るために、朝の時間の「すくすくチャレンジ」の問題等を整備し活用する。 ②武雄市漢字・計算検定テストをその結果の向上を目指す。	

●学力向上	基礎学力向上	言語力・読解力を身に付けた児童を育成する。	「言語力・読解力向上年間指導計画」を基に、「キャッチボール言葉」「アングル言葉」「学習用語」を系統的に指導する。	B	①身に付けた「学習用語」を、次の学習に生かすことができるような系統的な指導ができた。 ②身に付いた言語力を特別活動の場等で活用できる児童が増えたが、個人差が大きく8割までは達成できていない。	①児童の実態や指導の実態に応じて、「言語力・読解力向上年間指導計画」についても改善を図りつつ、「キャッチボール言葉」「アングル言葉」「学習用語」の定着を図る。 ②身に付いた言語力を活用できる児童が増えるよう、特別活動などでの活躍の場を用意していく。
		伝統的な言語文化に親しむ児童を育成する。	論語、百人一首などの言語文化を体験する週間を全校一斉に実施する。	A	①計画通りに、論語週間と百人一首旬間、わんぱく百人一首大会を実施することができた。 ②9割以上の児童が楽しく取り組んだ。 ③家庭の協力もよくしてもらった。	①論語、百人一首などを体験する活動のさらなる充実を図り、全児童が伝統的な言語文化に親しむことができるようにする。 ②家庭においても、論語、百人一首など伝統的な言語文化に親しむことができるような活動を行う。
	図書館教育	自から進んで読書に親しむ児童を育成する。	読書冊数目標を示し、「図書館まつり」を通して読書習慣を身に付けさせる。 おすすめブックの紹介、カードへの記録を通して、本を選んで読む態度を身に付けさせる。	C	①6月・11月に「図書館まつり」を行い、読書の啓発活動を行った。 ②目標冊数を達成した児童が12月現在24%と少なかった。 ③読書の啓発活動が足りなかった。	①放送や「図書館まつり」などで読書を奨励する活動を工夫し、読書習慣を身に付けさせる。 ②読書目標冊数の意識化を図るとともに、その成果を認める活動の工夫を行う。
	学習習慣形成	学習・生活習慣を確立する。	学習・生活習慣形成について共通理解させ、「学習用具のきまり」を各学級に掲示したり、チェック週間を年3回(4月・9月・1月)設けたりする。	B	①年間計画通りに3回実施できた。長期休業明けに生活を見直すという点はよかった。 ②達成率はおおむね9割超。 ③調査結果を全職員で共通理解し、全児童に広められなかった。	①学習・生活習慣形成の達成率の100%を目指し、児童と結果を共有するなど、児童の主体性を高める工夫が必要。 ②学習・生活習慣形成についての調査項目が多いので、小中連携も含めて3校合同研修会で見直しの必要がある。
●ICT利活用教育の推進	ICT機器を活用した指導力向上	ICTを活用した指導方法を工夫・改善する。	ICTを活用した指導方法の工夫等に係る研修会を実施したり、環境整備を行ったりする。	A	電子黒板やiPadを積極的に活用し、楽しくわかりやすい授業を行うことができた。	①電子黒板やiPadについての研修を深め、より効果的な活用を模索していく。 ②各教室に1台ずつ電子黒板を整備するなどし、さらに使いやすいICT環境を整える必要がある。
	ICT機器を活用力の育成	ICT機器を活用して進んで学習する児童を育成する。	ICTスキルタイムを計画的に実施し、児童にiPadのスキルを身に付けさせる。	A	ICTスキルタイムで身につけたスキルを活用して学習に取り組む児童が多く見受けられた。	ICTスキルタイムの内容を工夫するとともに、iPadでWEB検索する時のルールなど、情報モラルを指導する必要がある。
●心の教育	特別活動	望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育成する。	①活動前に集会や活動のねらいを明確にし、めあてを持って活動できるようにする。 ②集会の終わりに、ねらいに即して活動できたかを振り返る時間を設ける。	A	集会のはじめにめあてを伝えた。活動中はめあてにそって集会に参加することができた。会の終わりにふり返りをさせたが、ほとんどの子が達成できていた。	今後も、集会や活動のねらいを明確にし、めあてを持って活動できるようにする。集会の終わりには、振り返る時間を設けていく。
			①児童が自主的に活動する時間を設定するとともに、活動ノートや振り返りカードを準備し、児童自らが話し合っ計画、実行できるようにする。 ②児童から議題を提案できるよう、議題ポストを設置し、児童の問題意識を高める。	B	①委員会やクラブ活動では、活動の時間を保障し、見通しを持って自主的に活動をさせることができた。活動後は、ほとんどの児童が「よくできた」と答えており、活動への満足感が得られている。 ②議題ポストは、1学期に活用できたが、2学期には、有効に活用できなかった。	①今後も、児童が自らが話し合っ計画、実行できるように活動の時間を保障していく。 ②児童から議題を提案できるよう、代表委員会の議題と合わせて、活用法を工夫していく。
	勤労・奉仕活動	感謝の気持ちを持ちながら、学校及び地域の一員として勤労する喜びを感じさせ、自己有用感を育む。	学校をきれいにしようという意識を高めさせるために、月1回のクリーンタイムを実施する。	A	①9割以上の子どもが、一生懸命活動できたと振り返ることができ、上級生は下級生のお世話ができていた。 ②ボランティア委員会の子ども達を中心に、準備や後片付けもスムーズにできた。	月1回のクリーンタイムは、学校をきれいにしようという意識を高めさせるために有効である。今後も、縦割り班を生かし進めていく。
	縦割り班活動	異学年交流において互いを思いやる気持ちを持って、活動に楽しく協力する態度を育成する。	共遊で、計画表、振り返りカードを作り、めあてに沿って活動を振り返らせる。	A	①9割以上の子どもが、楽しく遊ぶことができた振り返ることができ、6年生がしっかりリードして活動することができていた。②遊びも計画的に進められていた。	共遊は、異学年で交流するよい機会となっている。今後も時間を確実に確保し進めていく。
	人権・同和教育	すべての児童が思いやりと信頼にもとづく人間関係の下に学校生活が送れるようにする。	「ハートの木」を作り、年間を通して友だちのよさや頑張りやカードに書かせ、認めあう活動を行う。	A	①年に2回のハートいっぱい週間で、一人1枚以上カードを書くことができ、友達よさや頑張りやに目を向けることができていた。 ②ボランティア委員会の子ども達が、ハートのカードの紹介をしたことで、活動が広がった。	「ハートの木」の取組は、友達よさや頑張りやに目を向けることで、校内に支持的風土が生まれている。マンネリ化しないように、掲示やカードを工夫するなどして継続していく。
			各学級で、学級活動や道徳などの年間計画にエンカウンターを取り入れた授業を位置づける。	A	SCの協力を得て、全クラスが、グループエンカウンターを取り入れた授業を実施することができた。	学期に1回以上、授業の実施ができるよう、授業例などの紹介や研修を行い。児童の人間関係を豊かなものにしていく。
	特別支援教育	教師の特別支援教育のスキルアップを推進する。	学期に1回程度、特別支援教育に関する研修を実施する。	B	研修等により、特別支援的な視点で児童を見たり、対応の仕方を意識したりすることができた。	特別支援的な手立てをより多く紹介し、意識したり、取り入れやすいような教材等を準備したりする。紹介しあう場を設定する。
		個別の指導支援計画の作成と支援を推進する。	① 個別の支援指導計画を立てる時に参考となる研修会を設け定期的に目標が達成できたか振り返る時間を設定する。 ② 個別の支援計画については修正を呼びかけ、指導に生かせるようにする。	A	前期と後期に個別の支援計画の作成・修正・ふり返りをする時間をとることで、指導の方向性や重点を意識して、児童と接することができた。	今後も個別の支援計画の作成・修正・ふり返りを行い全ての子どもへの困り感を支援する方向性や重点を意識して、児童と接していく。
	教育相談	きめ細やかな相談体制、SCや専門機関と連携しながら効果的な対応にあたる。	①教育相談週間を6月と11月に設定し、「がばいシート」を実施し、児童や学級の状態を把握する。 ②アンケートの結果をもとに教育相談を行い児童が相談しやすい環境を作る。	A	年間2回の教育相談週間において、個人の実態把握や悩み等を共有する機会を確保することができた。「がばいシート」は、各学級ごとに分析を行う時間を設定し、学級経営の参考にすることができた。	「がばいシート」を利用した教育相談週間は、個々人の悩みを知り、児童の心のケアをするのに有効であった。今後は、アンケートも行い児童が相談しやすい環境を作っていく。
		児童や担任、保護者間の教育相談の体制を設定し、効果的な対応にあたる。	①SCや専門機関との連携を図り、きめ細やかな相談体制をつくる。 ②教育相談に関するスキルアップを図るために、SCや専門機関による職員研修を行う。	A	SCによる児童の見方や心理的アプローチ等の教育相談の研修内容を、児童の支援や指導の中で生かすことができた。	今年度は、教育相談に関するスキルアップを図るために、SCや専門機関による職員研修を行うことができた。今後もSCや専門機関との連携を図り、きめ細やかな相談体制をつくっていく。
		体力の向上を図る体育的活動と運動	学校内外の体育的活動毎に児童の体力向上の意義を明確にし、計画的に実施していく。	A	①それぞれの体育的行事において各自が目標をもって活動することができた。 ②相撲大会、陸上記録会、町民運動会において最後まで意欲的に活動することができた。	学校内外の体育的活動に積極的に取り組み、児童の体力向上を図っていく。

●健康・体づくり	体育的活動	体育的活動	旬間を充実させる。	寒さに負けない体づくりのために、マラソン旬間や縄跳び旬間を計画的に実施していく。	A	①縄跳び旬間は縦割り班を中心に低学年から高学年まで楽しさを感じながら運動に取り組むことができた。学年間の交流、協力ができてよかった。 ②マラソン旬間は2月の寒さ厳しい中でも元気に運動場を走り回り、体力の向上に取り組むことができていた。	マラソン旬間や縄跳び旬間ともにその取り組みは児童の体力向上に効果を上げている。今後を計画的に実施していく。
	保健指導	病気の予防と怪我の防止を徹底させる。心身共に健康な体作りのために保健指導を充実させる。		病気や怪我予防についてお便りや学級指導等で啓発する。	B	①遊具での大きなけがはなく安全な使い方ができた。 ②歯みがきは93%がよくできていた。手洗いは給食前はよくできていたが、トイレ後は徹底できなかった。	①病気の予防において、手洗いはとても有効であることを、お便りや学級指導等で啓発する必要がある。
				保健室で問診し早寝早起き朝ご飯について個別指導をする。また、お便りで保護者の協力を求め、連携を図る。	B	①早起き(7時までに起きる)は97%できていた。朝食摂取は99%できていた。 ②就寝時間は(10時までに寝る)は87%ができていたが、高学年では11時以後に寝ている児童が25%いた。	②早寝早起き朝ご飯については、おおよその児童ができていますが100%とは言えない。できていない児童に個別指導をする必要がある。加えて、保護者との連携を図ることが大切。
	食育・給食指導	正しい食生活と望ましい食習慣を理解させる。	食育強調月間を設け学級指導を行う。放送やお便りを通して指導する。	A	①給食残量はほとんどなくよく食べている。市からも表彰を受けた。 ②食育強調月間や給食集会で食についての指導ができた。 ③マナーについては98%がよくできていると答えていたが、箸の持ち方など指導が必要な児童もいる。	5校時給食の取り組みを充実させ、より楽しい食事できるようにする。箸の持ち方など、家庭とも連携しながらより良い食習慣が形成されるよう指導の工夫を行う。	
	生活習慣形成	学校や家庭での生活習慣を確立させる。	月ごとに「くらしのめあて」を教室に掲示したり、全校朝会で指導したりする。 ノーテレビ・ノーゲームデーの呼びかけや結果発表をする。	B	①全職員の協力を得て、月初めの全校朝会で各月のめあてを児童に話すことができた。また、めあてを教室等に掲示して、児童の注意を喚起した。 ②ノーテレビデーを児童に声をかけ、1日だけでなく次の日にも取り組みをするようにしたこと、児童は月に1度は、ノーテレビデーを実施できるようになった。後半は月90%以上の実施率になった。	①月ごとの「くらしのめあて」を指導することはできている。しかし、そのめあてを児童がどのように取り組んでいるかの検証はできていない。めあてに対する児童の反省をどのように把握し、指導に生かすかの工夫が必要。 ②ノーテレビ・ノーゲームデーの意義についても児童に理解させることも大切。	
	交通指導	交通事故防止を目指す交通安全教育を推進する。	交通指導週間や交通教室を設け、事故の具体的事案を示して、実態に即した指導を行う。	A	①交通指導計画のもと全職員輪番で朝の交通指導を行った。登校時の状況を把握し、登校班への指導も随時行った。 ②年度当初には、全児童を対象に交通教室を計画し、行政、地域の方々の協力を得て実施することができた。	本校の通学路においても交通量が多くなっており、側道も狭くとても危険である。今後も、事故の具体的事案を示すなど、実態に即した交通指導を行う。	
	地区児童会	安全安心を目指す集団登下校や地区での生活を徹底させる。	集団登下校のきまりを守らせるとともに、地域の方の協力を得ながら、安全な登下校を徹底させる。	B	①定期的に地区児童会を実施し、地区での生活や登校時の様子などを把握してきた。また、毎週水曜日の集団下校時には、安全に気をつけながら登下校できるように一声かけてきた。 ②登校班での約束がきちんと守れていないところがいくらか見られた。	安全な登下校のための集団登下校であるが、車道に広がるなど危険な場合もある。一列で歩くなどのきまりを守らせる指導を徹底する。	
	防災指導	日常生活における災害への対処のしかたを理解させる。	火災・地震・不審者対応の避難訓練を実施し、安全確保の指導を行う。	A	DVDを用いたり外部から講師を招いたりして、火災・地震・不審者対応の避難訓練を実施し、安全確保の指導を行うことができた。児童は真剣に参加し避難の大切さを理解できた。	火災・地震・不審者対応の避難訓練を実施し、安全確保の指導を行うことができてはいるが、どれぐらい児童の身につけているかは検証できていない。児童の意識や個々の理解度も点検する必要がある。	
清掃指導	感謝の気持ちをもって、日常の掃除や大掃除にまじめに取り組ませる。	掃除の仕方を共通理解させ、学級で日常指導をする。掃除強化週間を設定する。	A	児童はまじめに掃除に取り組んでいる。7月12月の掃除強調週間も計画通り実施でき、児童は進んで学校をきれいにしようと、体を動かしていた。	今後も進んで掃除のできる児童を育てるため、学級で日常指導を充実させる。掃除強化週間も設定する。		

### ③ きめ細やかな連携

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
	●小学校低学年の学習環境の改善充実	生活習慣・学習習慣の定着	低学年の間に身につけておくべき生活習慣・学習習慣の定着を図る。	①TTによる指導を低学年から導入し、きめ細やかな学習指導を通して学習習慣を確立させる。 ②生活カードを作成し、家庭と協力しながら基本的な生活習慣を身につけさせる。	B ①担任による指導、TTや少人数授業による支援などにより、落ち着いた生活態度や学習態度を身につけつつある。 ②北中校区3校で作成したカードを利用して年3回の調査をしている。	①担任と級外との連絡調整時間を確保し、指導がさらに行き届くようにする。 ②チェック表の結果を保護者にも知らせ、意識をさらに高めていく。
	○小中連携	学習習慣形成 生活習慣形成 小中交流	北中校区で昨年度決定した9年間の学習習慣・生活習慣づくりに沿った取り組みを行う。	自分向上プロジェクト表を使ったチェック等を行い、保護者と連携して児童の育成に努める。	B 今年度も、小中連携の研修会において、特別支援研修会を行うことができた。学校・家庭生活チェック表等、学校の取り組みに対する保護者の理解度は60%程度であった。	学校・家庭生活チェック表の実施については、保護者の意識を高めるためにも積極的に働きかけていく。

### 本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題

### 6 総合評価

- ① 教職員総意の学校づくりは、全てA評価である。教職員が学校教育目標の達成に向け努力している。良き地域、保護者にも恵まれ、連携も良くできている。  
② 学びが分かる教育活動では、ICT利活用教育の推進とともに授業力向上の評価がよい。図書館教育のC評価は、目標冊数が達成できなかった児童が多かったためである。心の教育もほぼA評価であり、教育相談や縦割り活動、人権教育など充実している。健康・体づくりでは、高学年の就寝時間、ノーテレビデーや集団登下校に課題が残った。

### 7 来年度の改善策

- ① 評価基準がまちまちなところがあり、各項目の評価基準の見直しが必要である。  
② 学習・生活習慣形成についての調査項目が多いので、小中連携も含めて3校合同研修会で見直しの必要がある。  
③ 学校の安全点検の取り組みなど保護者の評価が低い項目については、「よく分からない」が含まれている。安全点検の様子なども知らせる必要がある。  
④ 各教室に1台ずつ電子黒板を整備するなどし、さらに使いやすいICT環境を整える必要がある。  
⑤ 早寝早起き朝ご飯については、できていない児童に個別指導をする必要がある。加えて、保護者との連携を図ることも大切。

●は共通評価項目、○は独自評価項目